九州大学学術情報リポジトリ
Kyushu University Institutional Repository

「文学倫理学批評」とは何か

任，潔
華中師範大学文学院 ： 博士課程四年

https://doi.org/10.15017/1957710

出版情報：九大日文. 31, pp.47-53, 2018-03-31. 九州大学日本語文学会
バージョン：
権利関係：

◎理論紹介

「文学倫理学批評」とは何か

任潔（REN Jie）

一、文学倫理学批評が生まれた背景

人類は倫理を表すために文字を生み出し、文字によって日常生活と人類自身の倫理に対する理解を記した。そしてテキストが生まれ、最初の文学が誕生した。こうした点から、時代、国、ジャンルの如何を問わず、すべての文学は倫理的な読みが可能である。

また、倫理批評（倫理の視点から文学を分析すること）の歴史を辿ると、その起源は古代ギリシアにまで遡れるが、二十世紀六十年代に入って以降、民権運動、反戦運動、学生運動、女性解放運動、環境保護運動などの高まりとともに最高潮に達し、批評の倫理性を強調するフェミニズム批評、新歴史主義批評、文化批評などが盛んに行われた。特に、アメリカの倫理批評はウェーン・C・ブース（Wayne C. Booth）氏の推進によってピークに達したが、九十年代に入ると急速に衰えていった。リチャード・A・ポズナー（Richard A. Posner）氏は、西洋における倫理批評は自分なりの術語と理論の特色がないため、方法論として文学倫理学から独立できなかったと述べている。

一方で、中国における文学批評は西方から強く影響を受けている。改革開放政策が実施されて以降、学術界では西方の文学理論と批評方法を積極的に吸収する態度が見られ、外来の文学理論が共存する状況にある。西方から中国に輸入された文学理論と批評方法を俯瞰すると、以下の三つに分類できる。

第一は、形式の価値を強調する形式批評である。第二は、文化と権利の関係や、文化とイデオロギーの覇権主義の関係などの分析を中心とした文化批評である。第三は、フェミニズム批評、環境批評、新歴史主義批評、ポストコロニアル批評などの政治、社会の視点から展開される文学批評である。これらの文学批評は政治、道徳、性別、種族といった角度から研究を展開してきたとはいえ、結局のところそれぞれの出発点、すなわち形式、文化、性別、環境などに関する問題に行き戻ってしまい、倫理とは次第に遠くなっていった。

また、中国における文学批評には、以下の三つの特徴が見られる。第一に、文学から遠く離れており、理論コンプレックス（Theoretical Complex）、命題コンプレックス（Preordained Complex）、術語コンプレックス（Term Complex）の傾向が著しい。第二に、「芸術のための芸術」という文学観によって、倫理的価値よりも文学作品における美的価値が重視されている。第三に、市場経済の影響で倫理的価値が排斥され、文学作品の商品としての価値を強調する傾向が見られる。そのため、ヒット・チャートや定価などが文学作品の価値を判断する基準になっている。

こうした学術的ないし時代背景のなかで、文学倫理学批評が聶珍釗氏によって提唱された。聶氏は、世界的レヴェルで学術界における中国の発言力を高めるため、伝統的な道徳批評を基礎に西方の文学批評の理論と方法を参照して、中国的な特徴を持つ文学批評理論のシステムを作り上げた。そして、その理論システムによって先述した諸問題への対応を試みている。したがって、聶氏が唱える文学倫理学批評は、中国の発展の流れときれいに重なり合っているといえる。

二〇一二年、習近平主席をはじめとする中国政府は、「中国の夢」という思想を発表した。習主席は、誰しも理想や夢を追い求めるもの、そして中華民族の偉大な復興の実現が近代以降の中華民族の最も偉大な夢だと述べた。「中国の夢」とは、国家の富強、民族の振興、人民の幸せを実現することである。特に注意すべきは、文学と芸術の復興も「中国の夢」の重要な一部だということである。「中国の夢」を実現させるためには文学と芸術の役割が重視されなければならない。文学と芸術を通して伝達された真善美の価値観が国民の道徳修養を高め、倫理的秩序のある生活にも非常に役立つのである。

現在、文学領域で最も際立った問題は、倫理的配慮と道徳的価値の欠如である。したがって、習主席によって唱えられた「中国の夢」は工業化と享楽主義によって生じた文学領域における一連の問題に対する適時な対応であって、中国文学を伝統的な道徳価値のもとに復帰させようとする呼びかけである。アメリカの学者ウィリアム・ベイカー（William Baker）氏と中国の学者尚必武氏が共同執筆論文で述べているように、聶氏によって提唱された文学倫理学批評は、習主席の呼びかけに対する学術界からの応答である。しかし、それは単なる政治的呼びかけに対する応答ではなく、工業化や商業化によって主導される現代に対する倫理的配慮でもある[1]。この十数年間、聶氏とそのチームはこの崇高な目標のために努力し続けている。

聶氏によって文学倫理学批評が初めて提唱されたのは、二〇〇四年一〇月であった。中国の著名な文学雑誌『外国文学研究』がその基本理論、研究対象、研究内容を紹介する論文を掲載した[2]。その後十年の間に著しい発展を遂げ、二〇一四年三月に中国国家社科基金の支援によって書籍の形で出版された。現在、聶氏の文学倫理学批評は、西洋の倫理批評や中国の伝統的道徳批評とは異なる独自の特色ある理論と言語システムを構築している。今後、西方から多数の学者が参加することで、文学倫理学批評のさらなる発展、国際化が促進されると思われる。

二、文学倫理学批評の基本的特徴

文学倫理学批評とは、文学の倫理的価値と教誨機能を強調し、倫理という視点から文学を読み、分析し、解釈する批評方法である。聶珍釗氏によれば、文学は本質的に倫理に関する芸術である。その基本的な機能は読者に道徳的な教誨を供することにある。したがって、文学倫理学批評は、以下の五つの観点から批評を展開する。

第一に、作者の道徳観と生きていた社会にとどまらず、その道徳観がいかに作品の中に表現されているのかまで考察する。第二に、現実世界で起こった道徳に関わる出来事と、作品から読み取れるその出来事に対する態度や理解との関係を考察する。第三に、作品に反映されている道徳観が読者や社会にどのような影響を与えたのか、また、作者と作品中に表現されている道徳をめぐる認識に対する読者の評価について考察する。第四に、作者の道徳的傾向が他の同時代作家とその作品に与えた影響を考察する。第五に、作者の道徳観とその作品における道徳的特徴を分析し、倫理の角度から文学と社会、文学と作者の関係、さらにそれらに関連した諸問題を考察する。

また、文学倫理学批評は単に倫理的視点から文学を批評するのではなく、史的唯物論の立場から批評を展開するため、アメリカの倫理批評や中国の伝統的道徳批評と比べて独自性を有している。例えば、倫理に関する諸問題を分析するとき、当世の道徳的規範に従うのではなく、史的唯物論の観点から出発して作品の創作された時代に行き戻り、その時代に通行する道徳的規範に従って作品の倫理的価値を発見する。

このように、文学倫理学批評は文学テキストを研究対象として、倫理的な角度から作品における人間と人間、人間と社会、人間と自然の関係を把握したり、人物の倫理的身分とその変化や、異なる倫理環境における人物の倫理的選択を分析したりする。そうした分析を通して、作品における倫理的教誨機能を明らかにするのである。

三、文学倫理学批評の基本的観点

（一）文学の起源について

文学の起源については、古今東西で様々な説がある。例えば、自然模倣説、浄化（カタルシス）説、労働説などである。文学倫理学批評の観点では、文学は特定の歴史段階における倫理観念と道徳生活に対する独特の表現様式であり、本質的には倫理に関する芸術である。初期段階の人間は自らを抽象的に認識しえなかったが、理性が成熟するにつれて実生活の中で直面しなければならない問題が多くなっていった。どのように病気や自然災害を解釈するのか、どのように物事の価値を判断するのか、どのように自分の生活様式を選ぶのか、そして、どのように人間自身を理解するのか。これらは人間が成熟していくなかで考え始めた問題であった。

蒙昧から文明へと歩んできた人間は、こうした問題について考えるだけではなく、答えを出されなければならなかった。文字が生み出される以前の人間が、どのように考え、解釈していたのかについては、資料不足のため考証することはできない。しかし、幸いなことに個人の生活や考え方を記録することができる文字が生み出されて以降、人間は文字で構成されたテキストを通して自らの素朴な理解を表現できるようになった。だからこそ、今、我々はテキストを通して人間がどのようにして蒙昧から歩んできたのか分かるようになった。

人間は理性を発達、成熟させていく過程で、実践活動によっ

て創られた文字を利用し、自らの認識や理解を記録することで最も古いテキストを生み出した。これが最初の文学であり、文字は人間が倫理について考えを表すために生まれたのである。

（二）自然的選択と倫理的選択

人類文明が発展していくプロセスのなかで、人間が直面する最大の問題は何であろうか。それは人間と獣を区別して認識すること、そして人間になるか動物になるかという、自らの倫理的身分を選ぶことである。十九世紀の中頃、ダーウィンは進化論を確立し、自然的選択（natural selection）によって全生物界の誕生と発展に科学的な解釈を行なった。進化論の観点から人類の歴史を考察すれば、人類文明の誕生は人間が自ら選択した結果だといえる。

人類文明の長い発展史のなかで、人間は二度の自我選択を行った。最初の選択は自然的選択である。これは、猿から人間へと進化していく過程における生物的選択にすぎないが、人間としての形式、外形を持ったことに最大の成果がある。外形により、人間は自らを他の動物と区別することが可能になった。ただし、自然的選択では根本的に人間とは何かという問題を解決できなかった。つまり、本質的には人間を他の動物と区別することができなかったのである。

ダーウィンは、自然的選択と進化に関する理論によって、また低級な生き物と同じように持つ同源的構造から、人間が低級な生き物から進化、発展してきたことを証明した。しかし、ダーウィンは物質の形態から人間がどのように発展してきたのかを述べるにとどまり、人間が人間であること、すなわち人間と他の動物の本質的な区別がどこにあるのかという問題には明確に答えられなかった。

この点に関連して、科学的社会主義で知られるエンゲルスも人間の起源について全面的に論じたことがある。彼は、人間は労働によって創り出されたとする観点を提出した。一八七六年、エンゲルスは「猿が人間になるにあたっての労働の役割」という文章のなかで、人間が動物から分離された根本的な原因が労働にあることを指摘した[3]。古代の類人猿ははじめ群れで熱帯と亜熱帯の森林に生息していたが、食物を探すために一部が地上に降りて活動を始めた。そして、二本足で直立して歩くようになり、前肢が開放されたことで、石や木の棒を使いはじめ、ようやく最後に手で道具を作れるまでに進化した。同時に、大脳を含め、体質も相当に発達し、様々な人間的な特徴が現れた。

エンゲルスの観点の核心は、労働が猿を人間へと進化させる過程で働いた役割を強調するところにある。手こそが労働の産物であり、手の発達が全身の筋肉に変化をもたらした。そして、労働のなかで言語が生まれ、言語がまた労働とともに猿の脳髄を人間の脳髄へと発達させた。

しかし、エンゲルスの労働に関する理解は生物進化論を超越しておらず、ダーウィンの自然的選択の理論を具体化したに過ぎない。別の言い方をすれば、人間が具体的にどのような過程を経て猿から進化してきたのかを解釈したということである。

人間が猿から進化していく過程で労働が重大な役割を果たしたことを疑う余地はないが、進化したのは労働ではなく人間自身である。それゆえ、人間を猿から区別させたものは何かという問いに労働の概念をもって答えることはできないのである。

進化を遂げた人間とそれ以前の段階にある猿や他の動物との本質的な違いはどこにあるのか。それが、エンゲルスが答えられなかった問いであり、労働の概念では解明できない問題である。そのように考えると、エンゲルスはダーウィンと同様に、自然的選択の理論によって人間が進化してきた過程を解明したに過ぎないといえる。

人間の自然的選択と倫理的選択は、異なる本質を持つ二種類の選択である。前者が人間の形式、外形の選択であるのに対して、後者は人間の本質に関わる選択である。人間を猿や他の動物から本質的に分離させたのは、この倫理的選択（ethical selection）である。旧約聖書の『創世記』に見られるアダムとイブの話をもって説明すれば、エデンの園に最初に現れた人間は生物学的な人間であり、動物や昆虫などの生き物とは異なる外形を持つものの、知恵はなく、獣と同じだといえる。そうした人間は、はじめ自身と他の生き物の区別に気づいていなかった。獣の一部として全裸で暮らし、空腹になれば木の実を食べ、渇けば河の水を飲み、自由自在で心配することもなく、非常に楽しい生活を送っていた。ところが、イブは知恵を得ることを望み、善悪の知識の樹から実を摘んで食べ、さらに隣にいるアダムにも食べさせた。イブとアダムは善悪の知識の樹の実を食べたことで知恵を得てしまった。そして、全裸に対する羞恥心が芽生え、その羞恥の感情を隠すために無花果の葉を綴って衣を作った。

アダムとイブは善悪の知識の樹から実を食べたことで善悪を分別できるようになり、倫理的選択の段階に入った。つまり、生物学的な人間から倫理意識の持つ人間に進化したのである。自然的選択は進化によって実現されたのに対して、倫理的選択は教誨によって実現されたのである。このようにして、人は善悪を分別し、正しい倫理的選択ができるようになったのである。

（三）スフィンクス・ファクター

スフィンクスは古代ギリシア神話の中のイメージである。彼女はテーベに向かう十字路に座り、通行人に一つの謎を当てさせ、答えられなければ殺すという始末であった。スフィンクスの謎は強い象徴的な意味を持っている。朝には四本足、昼には二本足、夜には三本足で歩くものは何か。この謎の答えは人間である。テーベの人々はなかなか正しい答えを導くことができなかったが、オイディプスはその答え――人間を正確に言い当てた。人生の朝には、人間はまだ赤ん坊の段階であるから、手と足で這って歩くため四本足である。人生の昼になると、人間は力強くなったので二本足になる。人生の夕方には、高齢で体も衰えて杖をつくようになり、三本足で歩く。スフィンクスは、オイディプスが答えを言い当てたため、恥ずかしさのあまり投身自殺してしまう。

スフィンクスは、女性のように長い髪にライオンの体と鷲の

翼、蛇の尻尾を持っている。この人間の頭とライオンの体が一体となった外形には、以下のような三つの意味がある。

第一に、人間にとって形式上最も重要なのが頭だということである。これは人間の生物的選択によって得た結果である。第二に、人間の頭には象徴的な意味があるということである。長期間の進化を経て生物的選択をした結果、人間に理性が芽生え始めたことを、人間の頭が象徴しているのである。第三に、ライオンの体は人間が獣から進化してきたことを示しているということである。ライオンの体は、人間の体にまだ獣の本性が残されていることを意味している。文学倫理学批評では、人間の頭とライオンの体が一体になっている特質をスフィンクス・ファクター（Sphinx factor）と称する。

「スフィンクス・ファクター」は、ヒューマン・ファクター（human factor）とアニマル・ファクター（animal factor）の二つの部分から成っている。これら二種類のファクターが有機的に組み合わさることで完全な人間が構成される。

ヒューマン・ファクターが高級であるのに対して、アニマル・ファクターは低級である。それゆえ、前者は後者を支配することができる。スフィンクス・ファクターは、生物性と理性という二つの角度から人間の内面に善悪が共存していることを説明する。獣性だけ持っている人間もいないし、理性だけ持っている人間もいない。スフィンクス・ファクターという述語は、我々が文学作品を分析する際、人物の理解に非常に役立つ。スフィンクス・ファクターの組み合わせや変化によって、文学作品における人物に様々な行動の特徴や性格が現れる。そして、様々な倫理的衝突が引き起こされ、最終的に様々な倫理的選択をさせるのである。

一方、ヒューマン・ファクターすなわち倫理意識は、人間の頭によって体現され、理性的意志として表れる。人間の頭は、人間が野蛮の時代から文明の時代へと進化していく過程で生物的に選択した結果である。それはまず、人間が形式、外形から生物的に変化したことを意味している。同時に、人間に倫理意識が現れたことを象徴している。ヒューマン・ファクターは人間性とは異なり、人間性の種といえよう。ヒューマン・ファクターがあってはじめて、人間は倫理意識を持つことが可能になり、獣から人間へと移行できるのである。

また、アニマル・ファクターはヒューマン・ファクターと対応する概念である。人間の根元的な欲望に駆り立てられ、自然的意志と自由意志の形式によって表現される。自然的意志はリビドー（libido）の外在的な表現であるが、自由意志は欲望（desire）の外在的な表現である。アニマル・ファクターは人間の体内に存在する非人間的な部分であるとはいえ、獣性と同列に扱われるべきではない。動物の体に存在する獣性は、理性で制御できない獣だけが持つ獣性である。オイディプスはなぜスフィンクスの謎を言い当てることができたのか。それは彼がすでに倫理意識を持つ人間に成長し、自身を獣と区別していたからである。にもかかわらず、オイディプスは近親相姦と父親殺しの罪を犯してしまった（『オイディプス王』）。それは、人間が理性を持つよ

うになっても、スフィンクスのライオンの下半身によって体現されたアニマル・ファクターが依然として体内に存在し、悪事を働く可能性が残っているからである。

しかし、スフィンクスは人間の頭を持っている。頭によって体現される理性的意志は、アニマル・ファクターを制御できるし、人間に罪を反省させることもできる。だからこそ、オイディプスは自身の深い罪業を意識することができたのである。彼は深い恐れに陥り、自ら目を突き刺すことによって懲罰を与えた。オイディプスの不幸は、野蛮と蒙昧の時代から歩んできた人間に倫理意識が芽生え、確固たる倫理観を確立していく過程が、少しく悲劇的な歴史であることを教えてくれる。

四、おわりに

二〇〇四年から二〇一八年までの十四年間で発展を遂げた文学倫理学批評は、中国国内で最も影響力を持つ理論の一つになると同時に、国際学界でも広く認められている。例えば、アメリカ・スタンフォード大学の Marjorie Perloff 教授、ペンシルベニア大学の Charles Bernstein 教授、ドイツ・ギーセン大学の Ansgar Nünning 教授、イギリス・ロンドン大学クイーン・メアリーの Galin Tihanov 教授、オーストリア・ウィーン大学の Vladivir Biti 教授、ノルウェー・オスロ大学の Knut Brynhildsvoll 教授、韓国・東国大学の Youngmin Kim 教授をはじめとする数多くの著名な学者から肯定的な評価を得ている。二〇一二年には国際文学倫理学批評研究会が設立され、これまでに中国・上海（二〇一四年）、韓国・ソウル（二〇一五年）、イギリス・ロンドン（二〇一六年）、エストニア・タルトゥ（二〇一七年）で年会及び国際学術研究討論会を開催してきた。そして二〇一八年、第八回国際文学倫理学批評研究会年会及び国際学術シンポジウムが日本（七月二十七～三十日、北九州国際会議場）で開催されることになった。文学倫理学批評は、今まさに目まぐるしい勢いで発展しており、今後、より顕著な成果をあげていくと思われる。

【注記】

1　詳細は、William Baker & Shang Biwu (2015). Fruitful collaborations: Ethical literary criticism in Chinese academe. Times Literary Supplement (No.5861, July 31, 2015). pp14-15 を参照。

2　聶珍釗「文学倫理学批評：文学批評方法の新探索」『外国文学研究』二〇〇四年十月、十六～二十四頁

3　詳細は、エンゲルス「猿が人間になるにあたっての労働の役割」『マルクス・エンゲルス選集』第三巻（人民出版社、一九七二年五月）を参照。

【付記】

文学倫理学批評については、すべて聶珍釗『文学倫理学批評導論』（北京大学出版社、二〇一四年）を参照した。

また、本稿における英語及び中国語文献の引用は、すべて引用者による翻訳である。

（中国・華中師範大学文学院博士課程四年）